

書評 ヴィクトル・クラフト「ウィーン学団」－ 科学と形而上学

大垣俊一

書評の本論に入る前に、今回紹介する『ウィーン学団』（ヴィクトル・クラフト著、寺中平治訳、勁草書房 1990）の‘訳者あとがき’から、私にとって特に印象深かった次の一節を紹介したい。それはこの本の訳者寺中が、ウィーン学団の賛同者であったライヘンバッハによるヘーゲル批判を引用しながら、自らの感慨を述べている部分である（以下、寺中によるライヘンバッハの引用）。

「次の文章は、さる著名の哲学者の著作からの引用である。『理性とは実体であり、また無限の力であり、その無限の質量は、自然及び精神生活のすべての根底に横たわる。理性はさらに、その質量を運動せしめる無限の形相であり、あらゆる事物がその存在を引き出すところの実体である。』多くの読者は、この種の言語的産物に我慢ができず、それに何の意味も見出せないところから、そんな書物は火の中へ投げ込んでしまいたいと思うだろう。このような感情的反応から論理的批判へ前進するためには、博物学者がカブトムシの珍しい標本を調べる時のような中立的観察者の態度で、いわゆる哲学的言語を研究することが必要となる。誤謬の分析は、言語の分析に始まるのである。哲学を研究する人々は、通常はアイマイな表現方法にいら立ちをしない。かえってはじめに引用したような文章を読むと、そのような人々は、この文章を理解できないのは自分のせいだ、とおそらく考えることであろう。従って彼らにとって、理性が無限の質量からできていて、その質量がすべての自然及び精神の底に横たわるのだから理性はあらゆる事物の実体であるということが、明白に見えることであろう。このようなモノの云い方に慣らされてしまって、‘教養’のより少ない人々なら云うであろうような文句をすべて忘れてしまったわけだ。」—この引用に続いて、寺中は次のように述べる。科学と哲学の著作を比べると、科学にも難解なものはあるが、それがわからないのは自分に非がある（＝頭が悪い!?) のであって、原理的には理解できるはずのものである。しかし哲学の難解さはそれとは質がちがう。いくら読んでも、何かわかったようなわからないようなところがある。ウィーン学団は、このような哲学的文章を批判して、それは何か述べているように見えるが実は何も述べていない、感情表現的なものと断じ、実在する事物や状況を指す言葉以外には意味がないと主張する。科学ではとらえられない、何か深遠な真理が述べられているかのように期待しながら、難解な書物を読み進める哲学徒にとって、ウィーン学団のこの思想は強烈であった…。

ウィーン学団とは、1900年代初頭、ウィーン大学を中心に形成された哲学者のサークルで、参加者たちは自らを「ウィーン学団」（Der Wiener Kreis）と称した。1929年に、その設立趣意書とも言える『科学的世界把握』を発表し、1938年までの約10年にわたり活動を続けた。メンバーおよびその賛同者には、当時20-40才代の科学

哲学の俊英たちーカルナップ、ゲーデル、ノイラート、ライハンバッハラが名を連ね、ウィトゲンシュタインやポパーも、メンバーの一部と関係を持って、その思想に影響を与えたとされる。著者のクラフトもメンバーの一人で、当時の活動を振り返って1950年に著したのが本書である。

19世紀末から20世紀初頭のウィーンは、とんでもないことになっていたようだ。当時、このオーストリア・ハンガリー帝国の首都には、ユダヤ人をはじめ多民族の移民が流入し、多人口、多民族の混乱の中に、学問、芸術の花が開いた。心理学のフロイト、アドラー、物理学のボルツマン、芸術ではアール・ヌーボーのクリムトや、音楽のマーラー、ブラームス、ワルターら。生物学ではミツバチのフリッシュや、‘異端の生物学者’カンメラーが、ヴィヴァリアム研究所を中心に活動したのも、この時期にあたる。いわば文化的熱狂とでもいうのか、知識分野に限っても、「現代の欧米を支配する、ほとんどすべての主義主張を生み出した」¹⁾とすら言われる。ウィーン学団が活動したのは、このような時代のウィーンだったわけである。

私の、この本に対する興味は二点あった。一つは、科学における形而上学の扱いである。形而上学の定義は難しいが、一般的には「物事の背後にあつて、とらえきれないけれども本質的な何かを仮定して構成された哲学体系」といった意味で用いられているようだ。‘神、善、霊魂’が、形而上学の伝統的なテーマと言われたりする。冒頭の、ライハンバッハラが批判した哲学とは形而上学のことであり、ウィーン学団では、この言葉はもっぱら批判的意味を込めて用いられた。観念的、思弁的な理論は、生物学、とりわけマクロ生物学の分野でもしばしば登場する。それを「形而上学批判」との関係でどうとらえるべきか。もう一つは、生態学の現場の研究にも関係してくる、実証、反証、またそれに伴う確率の問題である。これについては、ウィーン学団が、「仮説が事実と適合することをもって、仮説の正当性が示される」としていたのを、ポパーが批判し、「仮説は事実と適合しないことをもって否定される」という反証主義を打ち出したとする記述をどこかで読んだ記憶があるが、そのようなわかりやすいとらえ方でよいのだろうか。

ウィーン学団の思想的展開は、メンバーの多彩さを反映して論理学、言語論、倫理学など、広い分野に及んでいる。私にはそのすべてを理解する力はないし、その意図もないが、上記の私の問題意識に関連する部分について可能な紹介を行い、現実の研究局面に示唆を与えうる点について、検討してみたい。

形而上学

本書の末尾に載せられている、ウィーン学団の設立宣言『科学的世界把握』は、次のような形而上学への警鐘とともに始まる。「多くの人々が述べていることであるが、今日再び、単に実生活だけでなく、科学（学問）においても、形而上学的、神学的思考が盛んになってきている。」（p221）つまりウィーン学団は、反形而上学を旗印に結成されたサークルだったのである。その批判の内容は、本書によればたとえば次の

ようなものであった。「形而上学者と神学者は、自ら勘違いをして、そのような命題で何かを述べていると勘違いしているのである。しかしかかる命題を分析すると、そのような命題はなにも述べていず、生命感のようなものを表現しているにすぎない。」

(p 232)そして、「形而上学は、あたかも有意義な命題であるかのように見える、単なる言葉の組合せである。それは全くの擬似命題にすぎない」(p32)と断じた。

「では有意義な命題は何かというと、それが実在している事物とか状況を指している言葉のことである。」(p284 寺中解説)このようにして哲学から形而上学を排除することにより、哲学の領域は従来よりはるかに限定されたものになる。「そこで哲学の問題は、論理的問題、単に科学の論理分析の問題だけとすることができる。」(p 75)このような思想にもとづき、学団自身は、その方向性を論理経験主義、のちに論理実証主義と位置づけた。「科学的世界把握の特徴を成す本質的な規定として、次の二つが挙げられる。第一は、科学的世界把握は経験論的、実証主義的であるということである。つまり、直接的所与に基づく経験的認識のみ存在することである。第二に、… 論理分析の方法が用いられることである。」(p 235)つまりそれは、命題の内容と実際の自然現象(経験)との対応を基本としながら、論理学によって命題の論理構成の妥当性を確保する方向性と解釈できる。

こうしたウィーン学団の強力な形而上学批判には、二つの重要な背景があったようである。その第一は、同時期に活動した天才哲学者ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』(以下『論考』と略)で、学団は二度にわたり、この本の内容を一行一行検討する輪読を行った¹⁾。ウィトゲンシュタインは、イギリスのラッセルのところでも論理学を学び、その素養の上で、『論考』において‘写像理論’を提起した。それは「命題の論理形式が、それに対応しているはずの現実の形式と同一であることこそ(つまり、論理的に分析された命題の諸要素が、世界内の特定の対象を指示していることこそ)、当の命題の真理性を保証してくれる」¹⁾という考え方であり、ウィーン学団の経験主義に対応する。そして『論考』の中には次のように、明らかに後の学団の主張に取り入れられたと考えられる部分がある。「哲学的なことがらについて書かれてきた命題や問いの大部分は、虚偽ではなくナンセンスなのである。」「世界の内のどこに、形而上学的な主体が認められるか。」「哲学の正しい方法とは、本来次のようなものであろう。言いうること以外、それゆえ自然科学の諸命題以外—それゆえ哲学に関係のないこと以外—何ごともしやらないこと。そしてだれかが形而上学的なことを言おうとした時には、いつも、その人が自分の命題の中のある種の符号に全く意味を与えていないことを指摘してやること。」¹⁾

背景の二つ目として、当時発展を遂げつつあった科学、とりわけ物理学の存在があっただろう。アインシュタインの相対性理論の発表が1915年。それから間もなく1919年に、恒星の光が重力によって曲げられることが皆既日食時の観測によって確認され、相対性理論の正しさが示されるという劇的な出来事が起こった。疑問の余地なく実証されながら、めざましい進歩を続ける科学を尻目に、進歩しているのかいないのか、相変わらず「わけのわからない議論」を続けている観念論哲学や形而上学が、ばからしく思えてくるという時代背景は、おそらくあったのではなかろうか。なおかつ当時

はまだ、科学の負の側面が露わになってはいない。学団の『科学的世界把握』の末尾には、科学的世界把握の指導的代表者として、ラッセル、ウィトゲンシュタインと並び、アインシュタインの名前が記されている。個性豊かな哲学者が何十人も集まって一つのサークルを結成するからには、よほど強い動機があっただろう。発展する科学を背景に『論考』の論理を加え、伝統的ドイツ観念論など一刀両断！という野心的動機は、批判力に富んだ若手研究者には似つかわしいものを感じられる。しかしそれは同時に、著者クラフト自らが「過度な単純化、急進的」（初版前書き p vi）と回顧する極端な主張に発展する萌芽を含んでいた。

論理実証主義の徹底ぶりは、‘物理主義’‘行動主義心理学’などと呼ばれる分野によく現れている。ノイラートとカルナップは、あらゆる事態について語ることでできる概念体系を物理学に求め（物理主義）、自然科学の中で最も物質に還元することの難しいように見える心理学さえ、その枠組みの中でとらえうると考えた。その際分析の対象になるのは、客観的に把握できる表情や声などの身体的変化のみであり、個人の内省や、直感による他人の心情への共感などは排除される。「人間には、その肉体的な行動を超えた心的体験があるという前提は、物理的には、それゆえ科学的には、全く述べることができない。それは単に擬似命題を表現しているのである。それは形而上学である。」（p 166）「すべての心的なものを、身体の行動、つまり知覚において近づきうる層においてとらえるという行動主義的心理学は、その基本的な態度において科学的世界把握に近い。」（p 245）物理主義は初めから評判が悪かったらしい。そして、心的現象を反映する身体的兆候はごく限られたものであって、心理を分析するのに十分ではないこと、また自己観察のような心理探求の方法も物的証拠と同様に価値がある、などの反論を浴びて、結局放棄されるに至る（p 211）。

ところで、ウィーン学団の形而上学批判は、形而上学的言明が、論理的に無意味であるという強い信念に発していた。ウィトゲンシュタインの『論考』のこの点についての問題提起を発展させるべく、ウィーン学団は精力を注いで具体化に取り組んだが、当初予期したような形では成功しなかったようである。最終的には、「今や形而上学の命題を、簡単に無意味として処理することはできない。むしろ、形而上学の命題が有意味となる意味論体系を立てることを認めなければならない。ここでもって形而上学と科学の区別が、言語一般によって強制的に成される区別であるとするのが、放棄されたことになる。」（p40）という事態に至った。ただ、ある種の言語を仮定すれば、検証可能性を基準として科学的言明を有意味、形而上学的言明を無意味としうるが、それでは多分に恣意的で説得力に欠ける。「カブトムシの標本を調べるように、哲学的主張を研究する」（ライヘンバッハ）試みは、結局挫折したのである。一方‘他家’のウィトゲンシュタインもまた、『論考』以後の思索の中で、論理形式を明らかにすることのできないにもかかわらず有意味な命題が、多くあることに気づいて写像理論を放棄し、後期の‘言語ゲーム論’へと転じて行くことになる¹⁾。

この項の最後に、ウィーン学団の、生物学に対する見解を紹介する。『科学的世界把握』では、当時の科学の各分野における形而上学の問題が触れられているが、生物学については、次のようにある。「形而上学者は常に、生物学を特に好んで特別な領

域として位置づける。このことは、特別な生命力に関する理論、つまり生氣論という形をとって現れた。現代のこの理論の代表者は、過去の不明瞭で、あいまいな形式を、概念的に明晰に把握しようと努力している。‘優勢’（ラインケ）、あるいは‘エンテレキー’（ドリーシュ）が生命力の代りになっている。かかる概念は、所与への還元可能性という要求を満足させないがゆえに、科学的世界把握においては、形而上学的なものとして拒否される。このことはまた、靈魂の介入、つまり「精神的なものが物質的なものを指導する役割」を説く、いわゆる‘心的生氣論’にもあてはまる。」

（p 244）生氣論やエンテレキーという言葉は、生物学史の書物などに現れることはあっても、現在の生物学の中に生き残ってはいない。その意味で、ウィーン学団のこの点についての主張は、今日に通じる意義をもっていると言えるだろう。

検証、確証、反証

ウィーン学団が扱った多彩なテーマの中に、命題（仮説）の真理性は、いかにして確かめられるのかという重要な問題があった。この場合、特に問題になるのは、「カラスは黒い」（＝すべてのカラスは黒い）など、一般的な事柄を述べた‘普遍言明’である。ウィトゲンシュタインやシュリックは、究極的に正しいか否かを判定できないこのような言明は、検討から排除するという姿勢を示した。しかしそれでは、多くの重要な科学的仮説が、検討の対象外として扱えなくなる。そこで、カルナップやライヘンバッハがこの問題を取り上げた。普遍言明については、そこから導かれる結論が、事実（経験）と一致するかどうかを確かめ、あらゆるケースについて矛盾を生じなければ、この仮説は正しいと判断される（検証）。しかし実際には、すべてのケースについて確かめることはできない。この、部分的な検証に対しては‘確証’という言葉が与えられた。この言葉は、一般的な日本語の用語としては、「確かに証する」ということで、100%近い信頼度を想定しがちだが、科学哲学の用法はそうではない。しかしこのままでは、どこまで行っても仮説の妥当性は宙に浮いたままである。そこでライヘンバッハは、観察されたケースの中に、ある頻度を持って生じた現象は、それに続く新しいケースでも同じ頻度で生ずることを期待できる、と論じた。わかりやすく言うと、観察した100羽のカラスのうち、99羽が黒くて1羽がアルビノで白ければ、全体的にも1/100で白がいる、といった推論であろう。ただし、こういう単純な言い換えは曲解になるらしい。クラーフトは慎重に、「これは未来のケースに対する主張ではなく、それに従って行動するという決断である」と解説している。つまり事実がどうというのではなく、一つの行動基準として意味があるというのである。これは一種の帰納法であり、「ライヘンバッハの帰納の擁護」²⁾と呼ばれることもある。これに対してポパーは、詳細な検討によってライヘンバッハを批判し、「帰納の論理学は不可能。仮説の確率の代りに、仮説の確証を話題とすべき」（p210）と論じた。そして提起したのが、かの有名な「反証可能性理論」ということになる。仮説は、いくらそれに合致する事実を積み重ねても、それを正しいと証明することはできない。

このことをポパーは、「100羽のカラスが黒いとしても、101羽目のカラスが黒いとは限らない」³⁾として示した。しかし、仮説はそれに合致しない事実が現れた時に、確実に否定される。ポパーが、確率の代りに確証を話題にしているのは、この、反証によって仮説を否定するという他にない。はじめに示した私の問題意識について言えば、ウィーン学団は、仮説と事実の適合が即、仮説の正当性を保証するなど単純に言っていたわけではなく、そのとらえ方はもっと深かったことがわかる。しかしあえてそうした要素を学団の思想に求めれば、このライヘンバッハの考え方が、それに近いと言えるかもしれない。

ところで、素人考えで恐縮だが、私は未だにこの結論は居心地が悪い。われわれ研究者は、何らかの仮説が誤りであるかどうか知りたい、ということも確かにあるが、むしろ、それが正しいかどうか確かめたいということの方が多し。それを、一定の制限つきですら成し得ないとすれば、科学がこうした問題に発言する可能性が大幅に減じられる。そもそも私は、ポパーの「100羽のカラス…」の主張にも、素朴な疑問を持っている。ある集団から標本を取り出して、何らかの指標についてある比率が得られたとすると、標本がランダムに取られたという前提において、サンプル数の増加に応じてより正確に母集団での比率が推定されるという、例の統計的推定の理論はどう位置づけられるのか。私は今までに読んだ科学哲学の本の中で、検証や確証の議論に関連して、統計的推定や検定の問題が論じられたのを見たことがない。一方で、統計学の教科書もまた、こうした哲学的議論に触れることがない。わずかに、ある生態学の教科書⁴⁾で、「帰無仮説」の概念が、ポパーの反証主義に根拠を持つと論じているのを読んだことがあるのみである。あるいは統計学の手法は、論理実証主義の議論とは全く別に実用面で発達し、科学哲学と統計学は、お互いに無視し合って今日に至っているのか。あるいは私の知識不足なのか、または問題の立て方自体がおかしいのか…、今後の課題としたい。

ところで、クラフトの述べるウィーン学団での議論は、1900年代前半のものであって、その後の科学哲学の展開の中で、ポパーの反証主義もまた批判を受けることになる。⁵⁾そしてそれを根拠に、「ポパーはもう古い」と言わんばかりの見解が見られることがあるが、私にはそういう言い方がよくわからない。自然現象を相手に仕事をしている研究者にとって、自らの仮説の信頼度を確かめようとするならば、やることは確証（事実に合っているから信頼できるとする）か反証（事実に合わないから間違っているとする）のいずれかしかないであろう。こうした問題について、反証主義を批判した新科学哲学の思想は、何も具体的な指針を与えない。ポパーは古いと言う人達は、どのようにして科学的仮説の妥当性を主張するのか、提示しなければならないだろう。

生態学と形而上学

論理実証主義が批判する「形而上学」とは、第一義的には「論理的に無意味な命題」ということだが、それが経験世界内に対応する根拠を持たないという意味では、「経

験 (=事実) に照らして検証不能」と解釈してよいと思われる。ウィーン学団の形而上学批判には、しばしばそのような用法が含まれているし、また後にポパーは、反証可能性を科学と非科学を見分けるメルクマールとし、反証不能な命題を形而上学と位置付けた³⁾。従って、ここではこの両者の意味において形而上学を捉え、生態学に関連する問題を考えてみる。

マクロ生物学の分野で近年めざましい発展を遂げた分野に「行動生態学」があるが、ある経済学者が、それに触れて次のように述べている。「もはや生物学は形而上学の段階に入ったのではないかという気がしないでもない。たとえばセルフフィッシュジーオンや … などは、観察される現象を説明するにあたって、必ずしもその存在が実験的に確認できないようなコンセプトを持ち出して説明するという意味で形而上学と言ったわけなのですが。」⁶⁾ また、'The Selfish Gene' (邦訳「生物生存機械論」) を著した、行動生態学の旗手ドーキンスは、この自著に対する反論に答えた著作⁷⁾の冒頭を、次のような慎重な言い回しで始めている。「私が弁護しようとしているのは新しい理論ではないし、立証されたり反証されたりする仮説でもなければ、予測によって判定されるモデルでもない。…私が弁護しようとしているのはある観点であり、だれもが知っている事実や考え方についてのある見方であり、それについて新たな問いを発する方法なのである。…私は事実に関する何らかの命題の真理について人に納得させようとしているのではない。」ある生物現象が成立した背景として、遺伝子を単位とした淘汰を考えるか、個体、集団を単位とするかの論争は、一応生物現象を土台に成されているように見える。膜翅目昆虫の性比のように、それまで不可解としか見えなかった現象が、遺伝子淘汰の考え方によって初めて明快に説明される一方で、群淘汰で説明されてきた事象に、次々に遺伝子淘汰による説明が与えられる。あるいは数学的シミュレーションで、生物集団は進化の単位としては認めがたいことが示唆される。確かにこれらは遺伝子淘汰を有利にする心情的効果はあるが、一般的に言えば、仮説と事実が合致することが即、その仮説の正しさを証明するものではない。また、進化の単位を何に求めるかということは、最終的には‘進化史の実験’によって決着されるべきだが、それは実行不能である。私は行動生態学に対して、それが形而上学だとする批判が成されたかどうかは知らないが、経験主義哲学の本場、しかもポパーのいるイギリスや、ウィーン学団メンバーが多く移住して強い影響力を持ったアメリカで、学説の確証や反証可能性をめぐる批判が生じなかったとは考えにくい。またさればこそ、ドーキンスは自著に対する批判への反論で、真っ先にこの点に触れたのではなからうか。しかし私は、ドーキンスが「行動生態学は検証可能でも反証可能でもない一つの物の見方」とあっさり認めているのを見て、それでは行動生態学は、自然現象に対する一つの解釈論にすぎなくなるではないか、それならあの激しい群淘汰批判は一体何だったのかと、いささか拍子抜けした。

そもそも進化というテーマそのものが、根本的に検証不能なのではないかと思える。ダーウィニズムにせよ、ラマルキズム、定向進化にせよ、いかにして生物が進化してきたかを確かめるためには個々の種ごとに‘進化史の実験’を行い、それらを統合することが必要なはずである。しかしタイムマシンでもない限り、それはできない。私

はかつて、「進化論は、どこまで行っても進化‘論’であって、進化‘学’にはならない」と聞いたことがあるが、これはそのあたりの事情を皮肉った言い方であったかもしれない。そしてそのあいまいさを嫌ってか、生態学者の中には昔から進化に言及しない人々がいた。有名なのはエルトンだが、現在の潮間帯生態学においても、オーストラリアの A.J.Underwood の流派などにはその傾向が強く見られる。

必ずしもすべてが形而上学的というのではないが、日本のマクロ生物学において、強い抽象的、思弁的傾向を示す議論を展開した研究者に、今西錦治がある。今西は動物社会論を中心に多くの業績を残したが、具体的な動物種について論じた初期に対し、後期には、独自の用語を用いた概念的な議論が目立つ。今西は、第 I 同位構造、第 II 同位構造、複合同位社会、階級社会、第 I 段階構造、第 II 段階構造、第 I 生態系、第 II 生態系⁸⁾、さらに、スペシア、スペシオン、ゼニア、ゼニオン、オイキア、パラオイキア⁹⁾などの用語を次々に定義した。これを受けて展開された議論は、たとえば次のようなものであった。「そしてパラオイキアの構成要素であるスペシオンが、自らを脱個体化してゼニオンに成り下がることによって、パラオイキアもスペシオンと同格のゼニアに転落するという見方を提示した。この過程から考えるならば、完全に脱個体化されたゼニオンによって構成されるゼニアはまさに 1 個のスペシオンに相当するとはいえ、この方向への進化の過程においては当然不完全な脱個体化の段階の存在が考えられるところである（坂上昭一）。」⁹⁾現在の生態学研究者でこのような議論を理解する者はまれであろうし、またかつてこうした論争が行われたことを知る研究者すらほとんどいないだろう。ただ、これらの議論は論理的であり、独特の用語が多用されているとはいえ、その定義は明確で、現実の生物界に対応物を指定することができるという意味においては、「形而上学的」には当たらない。しかし具体的生物現象を扱う論文に比べて、著しく抽象的で概念的—その意味で哲学的—印象のあることは否めない。これがさらに今西の最初期の思想になると、その思弁性、観念性は際立ったものになる。今西の処女作である「生物の世界」で展開される思想は、たとえば次のようなものである。「そしてそこ（＝下等動物）にわれわれのような意識はなくとも一種の潜在する意識、あるいは意識以前の意識といった方がより適切と思われるような原始的意識を想像するということが許されてならないだろうか。」「それは結局生物に具わった主体性の発展ということにほかならないことは、私の初めから言いたかったところなのであった。そしてこの主体性を認めないで生物の生活を本能と解釈したり、…」 「中生代の海に住んだアンモン貝の貝殻に刻まれた彫刻が、時代を経て種が生長するに従い次第に緻密に繊細になっていったというが、そこにいわば生物の世界に芸術といったようなものが考えられはしないだろうか。もちろんわれわれ人間の場合と同じではないが、そこにいわば生物の世界における文化といったものがあるのではなからうか。」「一体 360 度の変異を考えるから、自然淘汰ということを持ち出してこなければならなかったのである。いい換えるならば環境の主体化を考えないで、主体の環境化のみを考えようとしたから、このような組み合わせになってしまったのである。けれども主体の環境化は環境の主体化であり、環境の主体化は主体の環境化であるというところには、はじめから 360 度の変異などということはある得

ない。」¹⁰⁾ 下等動物の持つ、意識以前の意識とは何だろうか。生物の主体性とは何で、それが発展するとは何を意味するのか。生物の世界の芸術、文化とは？ 環境の主体化、主体の環境化とは何か。これこそは、冒頭ライヘンバッハの批判する形而上学に相当する。もちろん今西は、この本を科学書として書いたのではなく、そこから自らの科学論文が生まれる源泉であると断っている。しかしそれゆえにこそ、今西思想の根底にある、ある種の志向性をよく表しているとも言えるだろう。最後の文章は、今西の後期の進化論説においても引用されている¹¹⁾。

生態学では通常、個体の総体を種個体群とし、種個体群の総体を群集、群集と無機環境を合わせて生態系とする。これが教科書的な理解である。これに対して川那部浩哉は「生物群集は、生物間の関係の総体である。」と述べた¹²⁾。私がこの言葉を聞いた時の第一印象は、言っていることはわかるが、何か奇妙な表現だ、というものだった。その奇妙さの内容については、次のようなエピソードを紹介すれば足りるだろう。私が大学院生の頃、京都のある場所で川那部の‘関係総体論’をテーマとする談話会が開かれ、私も末席に連なって話を聞いていた。そこで、奥野良之助（当時金沢大）が、次のように発言した。「個体も種もまた群集も、そこにあって見えるものだ。しかし関係というのは目に見えるものではない。目に見えないものが集まって、目に見えるものを作るというのはどういうことか。」この発言は、ウィトゲンシュタインが『論考』で述べるところの、命題は現実世界の論理形式に対応する形で提起されねばならない、という主張に重なる。奥野がウィトゲンシュタインやウィーン学団を踏まえてこのように言ったのかどうかは知らないが、表現上の違和感の底にある、論理的ナンセンスの気配を感知したのではなかったろうか。さらに、群集が個体や種の集合体であるか、関係の総体であるかということは、物の見方や用語の定義の問題であって、対立する見解のどちらが妥当かということ、事実を照らして検証するといった性質のものではない。論理的に無意味で検証不能な命題を形而上学と言うなら、これこそまさに形而上学であろう。もちろん川那部の意図は、それまでの群集遷移論やその発展形態としての有機体論など、群集や生物相を丸ごと環境条件に対応させるような、全体論的風潮に反対し、個々の生物とそれら相互の関係を重視するよう、注意を促すということにあっただろう。しかしそれならばもっと単純に、「個々の生物どうしの関係にも、もっと注目しよう。その方が群集論は豊かになる。」とだけ言っておけばよかったのではないか。

私は、生物学や生態学の中から、検証不能な言明や、検証法が当面わからない主張を一掃するべきだとは思っていない。第一そのようなことは不可能である。先に進化論や行動生態学が形而上学ではないかと述べたが、このように大きな理論は、その根本に必ず検証不能な命題を抱えている。検証可能というのは、より基本的な命題に還元できる、派生的なテーマに限って言えることであろう。形而上学をとことん排除しようとした物理主義が、いかに無味乾燥な科学像をもたらしたかということも考えてみる必要がある。

しかし、‘現場密着型研究’に対する形而上学の無秩序な侵入が、多くの混乱をもたらすことも明らかである。データにもとづく議論には、検証や反証の歯止めがかか

っている。しかし形而上学的言明はもともと検証不能なものであるために、いわば何を言ってもかまわない。歯止めがないままに、うんざりするような独断的な抽象論に発展して行く危険は、常にある。私は、現場の研究に影響を与えずにおかないような、力のある形而上学的議論ならば耳を傾けたい。しかしそういうものを展開するのが容易でないことは、エンテレキーや生氣論の歴史が物語っているだろう。

1920年代初めから私的サークルとして活動を始めたウィーン学団は、1929年に『科学的世界把握』を発表して哲学界にその名を知らしめ、多くの支持者を得た。学団そのものは1938年に、ナチス・ドイツの干渉により解散に追い込まれたが、その後メンバーの多くはイギリス、アメリカに渡り、論理実証主義を世界に広める役割を果たした、と本書にはある。それではこの学派はその後どうなり、今はどのように受け止められているのだろうか。近年発行された科学哲学の入門書には、その出だしに次のように書かれている。

…科学哲学という言葉は、必ずしも一義的ではない。少し考えただけでも、「科学について哲学する」という意味と、「科学的に哲学する」という二つに思い至る。第二の意味での科学哲学は、現在ではおそらくあまり支持者を持たないであろう。しかし、つい50年ほど前には、第一の意味に劣らず第二の意味も込めて科学哲学を研究する学派が主流だったのである。この学派は「論理実証主義」とか「論理的経験論」と呼ばれた。科学的哲学ということで、科学的方法に従って行われる哲学を意味する代表的な著作としては、たとえばライヘンバッハの『科学哲学の形成』がある。この本は、その序文でも明言されているように、あいまいで不分明な哲学的思弁から決別して、論理的方法と科学的知識に基づく哲学を確立すべきだという主張で貫かれている。ライヘンバッハのこの主張自体には多くの問題が含まれているのだが、「哲学的主張をできるだけ明確にして、白黒つけやすい形にすべきだ」という彼のメッセージの意義は、見失ってはならない。」²⁾

「多くの問題があった」がゆえに、論理実証主義はやがて支持者を減らし、すでに過去のものとなったかに見える。しかしそのメッセージの意義を、なお見失ってはならないと今日の哲学者に言わしめる力とは何だろうか。ウィーン学団は、「これは形而上学か」という問いを投げかけることによって、それまで漠然としか意識されていなかった問題に輪郭を与えた。多くの人々の常識に通じる素朴な感性は、論理的整合性や体系としての完全性という枠を越えて、影響力を与えつづけるもののようである。

引用文献

- 1) 藤木隆 1998 ウィトゲンシュタイン. 講談社学術文庫
- 2) 内井惣七 1995 科学哲学入門. 世界思想社
- 3) カール ポパー 1972 科学的発見の論理 (大内義一・森博 訳). 恒星社厚生閣
- 4) Underwood, A J 1997 Experiments in Ecology. Cambridge University Press.

- 5) パウル ファイヤアーベント 1981 方法への挑戦 (村上陽一郎訳). 新曜社
- 6) 浅田彰・黒田末寿・佐和隆光・長野敬・山口昌哉 1996 科学的方法とは何か. 中公新書
- 7) リチャード ドーキンス 1987 延長された表現型 (日高敏隆・遠藤彰・遠藤知二訳). 紀伊国屋書店
- 8) 今西錦治 1977 生物社会の論理. 思索社
- 9) 森下正明 1976 動物の社会. 共立出版
- 10) 今西錦治 1972 生物の世界. 講談社文庫
- 11) 今西錦治 1970 私の進化論. 思索社
- 12) 川那部浩哉 1960 川の動物群集をどうとらえるか. 生理生態 9: 1-10